



TITLE:

京大広報 No. 538

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 538. 京大広報 1999, 538: 735-752

ISSUE DATE:

1999-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196573>

RIGHT:



京大広報

No. 538

1999 9

目次

大学の動き	
長尾総長の連合王国訪問	736
シドニー大学及びノッティンガム	
大学との学術交流	736
副学長，部局長の交替	736
名誉教授称号授与式	737
部局の動き	
法学部創立百周年記念シンポジウム	
「法曹養成と大学の法学教育」の開催	737
第1回生命科学研究科シンポジウムの開催	738
医療技術短期大学部の動き	
医療技術短期大学部説明会	739
日誌	739
訃報	740
文化交流	
「オランダの風土と人と」 中川 博視	742
随想	
「学部学生として京大で学んだ日々」	
名誉教授 佐々木和夫	744
洛書	
「『真話』こぼれ話」 吉川 忠夫	745
資料	
国立大学教官等の待遇改善に	
関する国立大学協会の要望書	746
平成10年度予備的経費配分実績	748
平成10年度歳入・歳出決算額	
及び対前年度比較調	748
公開講座	
京都大学春秋講義（秋季講座）の開講	749
京都大学市民講座の開講	750
- 終了報告 -	
医療技術短期大学部第12回健康科学	
公開講座 1999 ～健康と環境～	750
話題	
クラブ紹介 ライフル射撃部	751
お知らせ	
宇治キャンパス公開 '99	751
超高層電波研究センター MU レーダー	
一般公開の案内	752



ノッティンガム大学 Sir Colin Campbell 副学長と
長尾総長の「覚書」交換

関連記事本文736ページ

大学の動き

長尾総長の連合王国訪問

長尾 真総長は、7月7日から15日まで、連合王国に出張した。

今回の出張では、ノッティンガム大学、ケンブリッジ大学及びオックスフォード大学（後者2校は本学との「学術交流に関する一般的覚書」交換校）、英国図書館（THE BRITISH LIBRARY）、教育雇用省（DfEE）を訪問した。

ノッティンガム大学、ケンブリッジ大学及びオックスフォード大学では、学長、副学長はじめ関係教官と研究・教育の状況について意見交換を行った。

また、ノッティンガム大学では、長尾総長に同大学名誉博士の称号が授与され、長尾総長は、授与者を代表してスピーチを行うとともに、同大学との「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

英国図書館及び教育雇用省では、関係職員との懇談及び視察をし、高等教育・研究の現状について意見交換を行った。

なお、今回の出張には、鈴木健二郎国際交流委員会委員長が同行した。

シドニー大学及びノッティンガム大学との学術交流

本学は、「学術交流に関する一般的覚書」を、オーストラリアのシドニー大学及び連合王国のノッティンガム大学と交換した。

シドニー大学との「覚書」は、長尾 真総長とシドニー大学 Gavin Brown 副学長の署名により、平成11年5月31日に交換された。

同大学は、1850年創立の私立大学であり、農学、建築学、歯学、法学、経済学、教育学、工学、医学、理学、学芸学、看護学、獣医学等の17学部を有するオーストラリアを代表する総合大学の1つである。同大学の教員数は約2,500人、学生数は約33,700人で

ある。

また、ノッティンガム大学との「覚書」は、ノッティンガム大学において長尾 真総長と同大学 Sir Colin Campbell 副学長の署名により、平成11年7月8日に交換された。

同大学は、カレッジとして1881年に創立、1948年に大学として設立認可された、学芸学、法・社会学、教育学、理学、工学、医学の6学部31学科を有する総合大学である。同大学の教員数は約1,000人、学生数は約16,200人である。

副学長、部局長の交替

副学長

三好郁朗副学長の辞任に伴い、その後任として宮崎 昭農学研究科教授（応用生物科学専攻・動物機能開発学講座担当）が8月1日副学長に任命された。任期は平成12年4月8日までである。



副学長

古澤 巖副学長の辞任に伴い、その後任として赤岡 功経済学研究科教授（組織経営分析専攻・経営・社会環境分析講座担当）が8月1日副学長に任命された。任期は平成12年3月31日までである。



農学研究科長・農学部長

宮崎 昭農学研究科長・農学部長の辞任に伴い、その後任として松野隆一農学研究科教授（応用生命科学専攻・食品生物工学講座担当）が8月16日農学研究科長・農学部長に任命された。任期は平成13年8月15日までである。



名誉教授称号授与式

平成11年7月29日（木）午前10時から、総長室において杉浦幸雄化学研究所長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行政され、長尾 真総長から高橋 徹元教授（化学研究所）に称号が授与された。



部局の動き

法学部創立百周年記念シンポジウム 「法曹養成と大学の法学教育」の開催

法学部創立百周年記念事業の一環として、7月3日（土）、京都ブライトンホテルにおいて、シンポジウム「法曹養成と大学の法学教育」が開催され、当初の予想をはるかに超えて大学及び法曹関係者約200人が出席した。

午前には、中森喜彦法学研究科長・法学部長の挨拶の後、岡田良雄大阪高等裁判所長官、および佐藤 禎一文部事務次官の祝辞が述べられ、引き続いて、佐藤幸治教授による基調講演「法曹養成と法学教育の将来」、ミシガン大学ロースクールのカール・シュナイダー教授による招待講演「アメリカの法学教育



制度」が行われた。

午後のパネル・ディスカッションは、田中成明教授の司会のもとに次の5人をパネリストとして招待し、行われた。

小島武司中央大学大学院法学研究科長

「法曹養成と大学の法学教育」

坂本秀文日弁連法曹養成センター委員長

「法科大学院構想と法曹養成制度を考える」

清水 潔文部省高等教育局大学課長

「大学改革と法学教育」

園部逸夫元最高裁判所判事

「法学部教育の改革について」

房村精一法務省司法法制調査部長

「法曹養成について」

パネリストからは、司法制度改革の一環としての法曹養成制度のあり方、および、それに対する大学の関わり方について、いわゆる法科大学院構想を中心として、現在の検討状況などが報告された。引き続いての質疑でも、フロアの大学・法曹関係者との間で、法科大学院をめぐる活発な意見が交わされた。

レセプションでは、滝井繁男近畿弁護士会連合会理事長の祝辞に引き続いて、上柳克郎名誉教授の発声で乾杯した後、和やかな雰囲気の中で、多数のシンポジウム参加者が有意義な意見交換を行った。

(大学院法学研究科)

第1回生命科学研究科シンポジウムの開催

生命科学研究科は、既存の部局間の壁を取り払い、生命科学研究分野を共通の言葉、“遺伝子、細胞”で語らい教育・研究を行う組織として平成11年4月に発足した。

この理念に基づき、「21世紀の生命科学に向けて」をテーマとして第1回のシンポジウムが7月14日、15日の2日間にわたり、京大会館で開催された。

本シンポジウムは、生命科学研究科設立のために集まった研究者がお互いに情報交換を行い、同研究科の活発な研究活動の推進、人的交流の活性化を図ることを主目的に、24研究分野の研究者により研究内容が紹介され、参加者との間で活発な討論が行われた。

シンポジウムは、統合生命科学(第1日目)と高次生命科学(第2日目)の2つのセッションに分かれ、動物、植物、微生物を研究対象とした生命の基本構造から遺伝情報の発現制御の仕組みに関する各分野の研究内容が紹介されたが、これは、日本における生命科学の最先端の研究が網羅されている。

参加対象は研究科の教官、大学院生を主体にしていたが、延べ400人近い大学院生・学部学生の参加者があり、生命科学への関心の高さがうかがえた。また、第1日目のセッション終了後には、懇親会が開催され他大学からの学生の参加者を含め、多くの学生が教官と熱心な議論を交わしている光景が見られた。

なお、生命科学研究科の概要については、ホームページ <http://www.lif.kyoto-u.ac.jp> で紹介している。

(大学院生命科学研究科)

医療技術短期大学部の動き

医療技術短期大学部説明会

医療技術短期大学部では、7月21日（水）午後1時から医療技術者を志す高等学校2・3年生及び進路指導担当教諭を対象に、大学説明会を開催した。

説明会では、まず京都教育文化センター（京都市左京区聖護院川原町）において、参加者全員に本短期大学部の特色、入試の概要、一般教育及び各学科の教育内容等の紹介を、資料とスライドを用いて説明した。

次に、会場を本学に移し公開施設の見学、学科別懇談会及び個別相談会を行った。

今年度は、参加者が自由に各学科の公開施設を見学し、学科別懇談会に参加できることとした。各学科の公開施設見学では、実際にさまざまな実習等の体験をし、学科別懇談会では、各学科での学生生活や入試に関する相談に応じるなどの個人相談を行い、参加者と教官、卒業生及び在校生との懇談の機会を設けた。



段差昇降訓練器を使用した運動負荷試験の体験実習

この説明会への参加者は、高校生、進路指導担当教諭及びインターネット等で情報を得た社会人と合わせて215人であった。

また、参加者に対しこの説明会に関するアンケートを行った結果、参加者の90.2%が回答し、その96.5%より「説明会が参考になった」との回答を得た。
（医療技術短期大学部）

日誌 1999.6.1 ~ 7.31

6月1日 外国人留学生パーティー

4日 人権に関する研修会

8日 評議会

〃 大学院審議会

15日 創立記念音楽会

16日 国際交流委員会

18日 創立記念式

〃 名誉教授懇談会

22日 評議会

〃 新キャンパス委員会

〃 将来構想検討委員会

〃 建築委員会

24日 総長、職員組合との交渉

7月6日 評議会

7日 総長、ノッティンガム大学名誉博士号授与式出席及び学術交流協定締結並びにケンブリッジ大学、オックスフォード大学等における高等教育・学術交流に関する調査のため連合王国を訪問（15日まで）

9日 同和・人権問題委員会

14日 環境保全委員会

16日 国際交流委員会

26日 附属図書館商議会

29日 アメリカ合衆国 工学教育評価団体 Lee W. SAPERSTEIN 次期委員長来学、総長及び関係教官と懇談

訃報

熊谷 直一 名誉教授



本学名誉教授熊谷直一先生は、7月2日逝去された。享年101。

先生は、大正13年京都帝国大学理学部物理学科（光学専攻）を卒業、同大学理学部地質学鉱物学教室理論地質学の助手に採用され、講師、助教授を経て、昭和20年5月本学理学部教授に就任、地質学鉱物学第一講座（物理地質学講座）を担当された。昭和35年12月31日停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和39年から同46年まで大谷大学教授を務められた。

先生は、地質学を物理学的手法で研究し、新しい

研究分野を広げることに努められた。特筆すべき業績としては、測地学とくに重力測定による研究、なかでも潜水艦による日本海溝付近の重力測定があり、それはその後のプレート・テクトニクスの研究の重要な資料となった。先生は、また岩石物理学とくに月面の反射率の観測結果から、月面の地質（月質）を調べる試みにも取り組まれた。さらに、退官3年前から花崗岩等の巨大な試料を用いた長期のたわみの実験を始められ、それはその後の生涯の研究となった。そしてその成果は地質学、岩石力学などの分野で高く評価されている。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院理学研究科）

加治 有恒 名誉教授



本学名誉教授加治有恒先生は、7月7日逝去された。享年74。

先生は、昭和22年京都帝国大学理学部化学科を卒業後、日本曹達株式会社に入社され、同社高岡工場研究室長を経て、同40年京都大学理学部化学科教授に就任し、新設の有機合成化学講座を担当された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和45年11月から同47年11月まで評議員を務められ、本学の管理

運営に貢献された。

本学退官後は、日本WHO協会の常務理事として活躍された。

先生は、有機化学、なかでもヘテロ原子、特に硫黄あるいは窒素原子を含む有機化合物の反応の解明と、ヘテロ原子をもつ官能基の特性を利用した有用な新規有機合成手法の開発研究において優れた業績を残され、有機合成化学の発展に多大の貢献をされた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院理学研究科）

西山 市三 名誉教授



本学名誉教授西山市三先生は、7月16日逝去された。享年97。

先生は、昭和2年京都帝国大学農学部農林生物学科を卒業、同大学農学部副手、助手、講師、助教授を経て、同21年京都帝国大学食糧科学研究所

教授に就任された。昭和31年京都大学農学部配置換えとなり同40年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、米国ウィスコンシン大学客員教授、米国ミズリー大学客員教授、財団法人木原研究所評議員及び名城大学教授を歴任された。

先生は、植物の遺伝学、なかでもエンバク属の細

胞遺伝学的研究，栽培植物の野生種・原種の探索と保存，人為倍数体の育種の利用に関する研究，有用植物の放射線遺伝学的研究，種間交雑の成否に関する極核活性化説の提唱など，多岐にわたる研究分野において多くの業績を残された。特に，細胞遺伝学を育種学的に応用した功績は顕著で，その研究業績

に対し昭和24年日本遺伝学会賞が授与された。

これら一連の功績により，平成2年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院農学研究科）

米谷 榮二 名誉教授



本学名誉教授米谷榮二先生は，7月17日逝去された。享年88。

先生は，昭和9年京都帝国大学工学部土木工学科を卒業，同大学工学部講師，助教授を経て昭和31年教授に就任，土木工学科土木計画学講座，ついで交通土木工学科交通施設計画講座を担当された。昭和50年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は，昭和50年4月から岡山大学工学部教授，同52年4月から同57年4月まで福山大学工学部教授を務められた。

先生は，土木工学，中でも土木計画学，交通工学に関する研究において先導的な研究業績を残され，その領域の開拓と発展に大きく寄与されるとともに，都市計画の分野においても多大の貢献をされた。

また，土木学会，日本都市計画学会，日本オペレーションズ・リサーチ（OR）学会，日本地域学会などにおいて，副会長，理事，支部長等の要職を歴任された。

これら一連の功績により，昭和59年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院工学研究科）

高安 正夫 名誉教授



本学名誉教授高安正夫先生は，7月19日逝去された。享年90。

先生は，昭和8年京都帝国大学医学部を卒業，同大学医学部講師を経て同21年から松阪市民病院に院長として転任された。昭和24年三重県立医科大学教授，同40年京都大学教授に就任，内科学第三講座を担当された。昭和48年停年により退官され，平成9年京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は，昭和48年4月から同55年3月まで国立京都病院長を務められた。

先生は，心房内興奮に新しい伝導系を発見されたことで有名である。また，心放射図と呼ばれる新しい循環動態解析法を開発され，循環器学の分野において多大の貢献をされた。また，日本循環器学会理事，理事長を歴任された。

これら一連の功績により，昭和56年4月勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院医学研究科）

足利 健亮 大学院人間・環境学研究科教授



大学院人間・環境学研究科教授足利健亮先生は、8月6日逝去された。享年62。

先生は、昭和34年京都大学文学部史学科を卒業され、引き続き同大学院で学ばれた後、同37年京都大学教養部助手に就任された。その後、追手門学院大学文学部講師、大阪府立大学教養部講師を経て、同49年京都大学教養部助教授、同61年同教授、平成4年に大学院人間・環境学研究科教授に就任され、文化・環境論講座を担当された。平成5年10月から同9年9月まで同研究科長を務められた。

先生は、古代日本における官道が直線的な計画道

路であったことを論証されるとともに、恭仁京・平安京などの古代宮都の研究、あるいは聚楽第・伏見城下町を中核とする秀吉の都市経営構想の研究など、多岐にわたる先駆的かつ独創的な研究を展開された。それによって、先生は日本を中心とした古代および中近世の空間構造の解明に貢献され、人文地理学のみならず隣接学問にも影響を与えられた。主な著書に『日本古代地理研究』『中近世都市の歴史地理』『考証・日本古代の空間』などがある。

また、人文地理学会、条里制・古代都市研究会の会長を務められた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院人間・環境学研究科)

文化交流

「オランダの風土と人と」

中川 博視

1997年11月5日から1998年11月4日までの1年間、文部省在外研究員(若手)としてオランダのワゲニンゲン農科大学に滞在しました。理論生産生態学講座のヤン・ハードリアン教授のもとで、作物のシミュレーションモデルや地球環境変化と作物生産の問題について研究を深めさせていただきました。

ワゲニンゲン農科大学は、オランダ唯一の農学関係の大学で、キャンパスはライン川河畔のワゲニンゲンという小さな町に散在しています。学生が多いため、3万人という人口の割に活気に溢れた美しい町でした。ローマ時代からの古い町で、第二次大戦後ドイツから解放されたときに調印の行われた町でもあります。国立の農業研究機関も同じ町に立地し、大学と緊密な関係を保ちながら研究が進められていました。

日本と同様に狭い国土と高い人口密度を持ち、生産活動と環境の調和という問題を、切実感をもって体験してきた国の風土と人々の生活を肌で感じたかったということも、滞在先にオランダを選択した

理由の一つでした。低地国と呼ばれるだけあって、平らな土地の連なりである国土の4分の1は海面より低いそうです。オランダ人は、山のことを話すときにちょっと恥ずかしげに、そして悔しそうに語るのが印象的です。ある時、ドクターの学生たちが、ワゲニンゲン・マウンテンについて話していました。それは何処だと尋ねると、あなたは毎日そこを通って大学に来ているじゃないかという。よくよく聞いてみれば、彼らは標高30mあまりの小丘をマウンテンと呼んでいるのでした。オランダといえば、ポルダー(干拓地)と風車のイメージがあまりに有名ですが、現在、風車は観光用、もしくは粉引き用として所々に残されているにすぎません。代わって、壮観に立ち並ぶ風力発電機が目を引きました。土地利用は、58%が農耕地で森林はわずかに10%です。農耕地の50%以上を占める草地は水路で区切られており、そこに牛や羊が所々に放し飼いにされているのが典型的なオランダの風景です。その光景が、毅然として人為を感じさせながら、それでいて自然に

対して主張の控えめな、一種独特の調和を醸しているのです。かつての日本の農村地帯にも、この種の均衡あるいは美しさがあつたはずです。現代の日本の、特に近郊部田園地帯の雑然とした雰囲気を思い出すにつけ、学ぶべきものがあると感じました。

オランダ人が自ら評して言うには、オランダ人社会の特徴は、平等主義、功利主義、組織的、貿易指向、プライバシー重視という5つのキーワードで捉えられるとのこと。しかし、そのプライバシー重視に反するかのような、オランダ家屋の窓の大きさには驚かされました。通りに面した窓が特に大きく、ほとんど壁面いっぱい広がっています。しかも、夜ですらカーテンを引かない家が多くありました。窓が大きい理由を何人かのオランダ人に聞きましたが、明るくていいとか、他国の窓の方が小さいんだとか、はっきりした答えは返ってきませんでした。ある本には、プライバシーを重視する反面、他人と違っていていると思われたくなくて、どうです、我々はこんなに‘ふつう’なんです、と部屋の中を見せることによってアピールしてるんだとも書いてありました。

人々の生活は、極めて質実であるとの印象を受けました。街行く人の服装は気取りがなく、食事も慎ましかったものでした。技官のファン・ルールさんから夕食の招待を受けたときのことです。代表的なオランダの家庭料理スタンポットをごちそうしていただきました。マッシュポテトのようなもので、その時は、エンダイブをミキサーにかけ混ぜ込んでありました。大量に盛られたスタンポットとチーズを肴に、夕刻から10時くらいまで、ビールとワインで楽しい一時を過ごしました。

滞在期間の後半は、100年以上前に建てられた典型的なオランダ家屋の3階を借りていました。家主は昆虫学者のニーリング氏でご家族と下階に住んでおられました。ご夫妻には、ミラとポールという二人の子供がいます。ミラはインド生まれの2歳半の女の子、ポールはインドネシア生まれの6歳の男の子です。それぞれの故国で養子にされたそうです。この子たちは本当の我が子よ、と微笑まれた奥さんの顔を思い出します。それとともに、彼らの故国、出生にまつわる一つ一つの出来事や記念品、そして彼らのルーツをととても大切にしておられました。ミ



ニーリングさん一家

ラは片言のオランダ語を話し始めたところで、まだ奥さんのお腹から生まれてきたと信じています。ポールは自分がインドネシアからやってきたことをすでに知っています。最近、どうして僕は他の子と違って、背が低いのか、と聞くのだそうです。その時、ニーリングさんは、背の高さなんて問題じゃないよ、インドネシアの人はとても親切で優しく、ポールもそんないいところをいっぱいもらってるんだよと答えるのだそうです。インドやインドネシアに生まれながら、オランダ語を話す二人の子を見るにつけ、人は人の中で暮らし、言語や所作、思考法などの人生の基本的枠組み、いわば人生の基盤を身につけ、その人と成り行くのだと思わずにはおれませんでした。きっと彼らはニーリング夫妻のもとで、オランダ人というより、地球人として育つのだと思います。

オランダで、その風土と人々との出会いを通して、人間の抱く基盤の異質性とそれを超えて人々を繋ぐ人間の共通性というものを強く感じた一年でした。

(なかがわ ひろし 大学院農学研究科助手)

随想

「学部学生として京大で学んだ日々」

名誉教授 佐々木 和夫

京大に入学する前、マックス・プランク（Max Planck）シュレーディンガー（Erwin Schrödinger）など物理学者の本に巡り会い、自然科学論、因果律と自由意志などの問題を知った。また、ヘルムホルツ（Hermann von Helmholtz）の神経生理学に関する研究を通じて脳の認識機構にも興味を抱いた。1950年に入学して医学部の授業（講義はともかく、実習には熱心に出席した）とは別に、理学部の物理学教室に通い、講義や演習を受け、夏休みには実験室で、当時の最先端の研究の手伝いなどをさせてもらった。日常生活は窮乏し、夏はクーラーなどはなく、暗室での実験計測は汗まみれでも、楽しくて夢中であった。また夏の午後、法然院の縁側には東山の樹木から天然クーラーの涼風がかかり、静寂で、天野貞祐訳のカント『純粹理性批判』をはじめ、西田幾太郎、田辺 元などの著書を読むのに最適で、ついでにやすらかな昼寝もできた。

1947年に出版されたウィーナー（Norbert Wiener）のサイバネティックス（Cybernetics）の本をその頃入手し、強いインパクトを感じながら読んだ。その第一章に「ニュートニアンタイムとベルクソニアンタイム」があり、啓発された記憶がある。ちなみに最近読み返してみると、ウィーナーのベルクソニアンタイムの記載は必ずしも十分でないように思われる。そのうちウィーナー博士が来日され、京大時計台下の講堂で講演会が、後に大学院生、助手として御指導いただいた故大谷卓造生理学教授の司会であり、満員の盛況であった。

1954年の卒業前のある夕べ、同級生の小川和朗君（後の京大名誉教授 故人）と坂本吉正君（後の大阪市名誉教授）が世話人で、「医学概論」の会が開催された。今でいう自主ゼミの類である。講師は、^{おちだか}澤瀉久敬（大阪大学 哲学、医学概論）、前川孫二郎（内科学）、天野重安（病理学）の三先生で、百人近い学生と教官が参加した。そこでは、広く科学論、医学概論（哲学）、心身問題などが論じられた



が、とくに「ベルクソンの時間」の問題で白熱した論議があった。天野先生がベルクソンの創造的進化から時間の問題を話されたところ、生理学教室の一大学院学生から「時間の問題はエルゴート理論（統計熱力学）の時間 空間変換式によって決まる」と発言があり、天野先生は「お前達はくだらんブラカードを掲げやがって」と激怒された。前川先生の取りなしでその場は収まったが、こんな面白い会こそ「大学そのもの」だと痛感した。

あれからおよそ四十年たって、期せずして再びあの「ベルクソニアンタイム」に関心を持つことになった。十年余り前から、人の大脳前頭連合野の機能を脳磁計（脳の出す微小磁場を超伝導の原理を利用して計測する装置）により研究していて、脳活動と「時間」の関係に興味を持ちはじめたためである。ベルクソンが1889年に著した原著を見る必要に迫られ、京大の図書館で探してもらったところ、1938年版が蔵書のなかにあって、さすがと感激して借用できた。フランス語の原書 *ESSAI SUR LES DONNÉES IMMÉDIATES DE LA CONSCIENCE* が理解できるわけではないが、重要な言葉を英語で表現するのに元のフランス語が必要なためである。ここで再び澤瀉久敬先生の著書を参考書として重宝させていただいている。

一学生として所属する学部の枠を超えて自由に学ぶことができた。御教示いただいた多くの先生、さらに多数の先生の名著などに、しみじみと「学恩」を感じる。あの終戦後の混乱期にもかかわらず、真理探究の学問の府として厳とした京都大学に学んだことを幸せに思う。

（ささき かずお 元医学部教授 平成5年退官、専門は脳生理学）

洛書

『真誥』こぼれ話

吉川 忠夫

『東方学報』71冊（1999年3月刊）に「『真誥（しんこう）』訳注稿（4）」を發表したことによって、長年に及んだ『真誥』との付き合いにひとまずのきりをつけることができた。『真誥』は、4世紀に降臨した神々の言葉を、およそ1世紀半後の陶弘景が集成した道教の文献である。

人文科学研究所の共同研究のテキストとして、儒教文献でもなく仏教文献でもない道教文献を取り上げるのは初めての試みであった。『真誥』の会読を開始したのは1986年の4月。それからちょうど10年が経過した1996年3月に『真誥』20巻をようやく読みおえた。その間、隔週に開かれる共同研究班に参加して訳注原稿の作製を分担された方々は20名を超す。それはまた、最初は提出される原稿が手書きであったのが、次第にワープロ、パソコン使用のものがふえ、ついに大半を占めるに至る、そのような10年でもあった。かくしてうずたかく積み上げられた原稿を、同僚の麥谷邦夫教授と二人して整理のうえ、『東方学報』に4回にわたって分載したのである。13年にも及んだ『真誥』との付き合い。まったくの畑違いの某教授から、なかばあきれ顔に、何を呑気なことをと、いくらか軽侮の気持ちをはこめた言辞を呈せられたこともあったけれども、しかし『真誥』は一筋縄ではゆかぬ代物なのだ。道教教理の知識が求められるのはもとよりのこと、さまざまな文体の文章が交錯し、他ではお目にかかることもない言葉に往々にして出会う。長い年月を費やしたことの遁辞としてこのように言うのではけっしてない。なにしろ神々を相手にするのだから、これも致し方があるまい。

「訳注稿」の「解題」にも記すことのなかった瑣事をひとつ。『真誥』の編者である陶弘景の生卒年についてはいくつかの資料の間で違いがあるものの、南朝の宋の孝建3年（456）の生まれ、というのが有力なのだが、陶弘景のまたひとつの編著である『登真隱訣』に、「本命日」なるものを説明して、「たとえば宋の孝建3年丙申の歳の4月30日甲寅の日に生まれた者は、6月13日に至って丙申の日が得られるが、それが第一本命日である」と述べられているのは、その説を一層補強するのではあるまいか。孝建3年の4月30日が甲寅、6月13日が丙申に当たることは陳垣氏の『二十史朔閏表』によっても確認できるところ。陶弘景はいささかの遊び心をはたらかせて、自分の誕生日を説明の材料に使った蓋然性がたかいであろう。これほど昔の人間で生日まで分かるのは、天子ででもないかぎり、よほど希有のこと。私としてはちょっとした発見である。

（よしかわ ただお 人文科学研究所教授）



資料

国立大学教官等の待遇改善に関する国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会から国立大学教官等の待遇改善に関して、以下のとおり人事院総裁、大蔵省給与課長及び文部大臣に要望書を提出し、その趣旨に則り実現方を要望した旨報告があった。

平成11年 7月14日
国立大学協会会長
蓮 實 重 彦

記

国立大学教官等の待遇改善に関する要望書

国立大学教官等の給与等の待遇改善については、人事院をはじめ関係機関の特段の配慮を得て改善がなされてきたところであり、特に、大学特有の専門職である技術職員については、平成10年度から組織上の位置付けを行い、行政組織俸給表（一）7級定数の標準化及び同6級定数の大幅増が措置され、処遇の改善が図られたこと、また、本年度からは各大学を横断的に実施する研修制度が設けられ、資質の向上に向けた環境の整備がされるなど、関係各位のご努力に深く感謝する次第であります。

いうまでもなく、近年、教育改革の問題が焦眉の国家的課題とされ、大学においても、その取り巻く環境が大きく変わりつつあり、大学改革が喫緊の課題となっております。これらの課題に応えるうえで、今よりもまして大学自身がその教育・研究体制並びに運営体制の改革に取り組むことが必要であり、各国立大学が自己点検・自己評価を行うとともに外部評価も実施するなど、大学の改革と活性化の契機とすべく努力しているところであります。

それとともに、大学の質的向上を図るには、その担い手である大学教官等に有為な人材を確保することが基本的な前提条件であり、それを充たすためには大学教官等の待遇改善を図ることが一つの必要条件であります。また、平成7年に公布、施行された「科学技術基本法」では、国は、研究者等の職務がその重要性にふさわしい魅力あるものとなるよう、研究者等の適切な処遇の確保に必要な施策を講ずるものとしているところであります。

しかしながら、それはいまだ十分であるとは言い難い状況にありますので、さらに以下の諸点につき、ここに重ねて強く要望する次第であります。

1. 教育職（一）の俸給水準の引上げを行う等を含め俸給体系を是正すること。

大学は高等教育および学術研究を推進・発展させる中心の存在として社会の付託に応えて、その任務を果たしている。科学技術の急速な進展と国際化の時代にあつて、その責務は益々増大しているところである。そのときにあつて、大学の教学の中心の担い手は大学教官であり、教育・研究について絶えざる情熱と高い能力を有する優れた人材を擁することは大学の根本であることに鑑み、その俸給をその職務と責任に見合う水準に引き上げるよう特段の配慮を強く要望する。特に近年、国立大学の教官の給与水準が民間企業研究所や私立大学のそれを大幅に下回っている実態が人材確保の障害の要因ともなっていることに配慮しその急なる改善が待たれる。

また、助手について高校教諭の給与を下回る実態や教務職員の給与の頭打ち等の問題があり、これら職員の給与の格差是正を図る。

なお、以上の俸給水準の引上げと同時に特に中堅教官の給与配分について改善するとともに、平成11年度に改正された昇給停止制度についても、教官の職の高学歴による高年齢就職等による特殊性に着目してその年齢の引上げを図る。

2. 学長・部局長（事務局長等を含む。以下「部局長等」という。）について指定職の完全適用並びに指定号俸の引上げを図ること。

指定職制度は、特定の職務就任を条件に適用するのが本来の趣旨であることを踏まえ、部局長等については、その在任期間中はすべて指定職俸給表が適用できるよう措置するとともに、指定号俸の引上げを図る。

また、教育、研究の功績顕著な教授に対する指定職の適用拡大については改善が図られつつある

が、まだ十分な状況とはいえないため、さらに拡大を図る。

3．管理職手当の適用対象の拡大と増額を図ること。

近年、大学における管理運営の職責が益々重くなりつつある実情に鑑み、全学的な事項を審議・検討する委員会の委員等の学内教育行政の要職にある者について、管理職手当支給の途を開くよう配慮する。

なお、部局長等について指定職の完全適用を前項で要望しているところであるが、指定職が適用されるまでの間、引き続きその増額を図る。

4．大学教官特有な職務に見合う手当として「大学研究調整額」(仮称)を新設すること。

大学教官は、高度の専門教育を行うばかりでなく、進展極まりない学術の研究について一定の業績を常に要請される。そのため、各種学会活動や独自の情報の収集等多様な教育・研究活動を遂行することが必須となっている。

しかしながら、このような多様な教育・研究活動に際して、自費から支出する研究費が少なくない。この特別な経費負担に対する措置として「大学研究調整額」(仮称)の新設を図る。

なお、職務の特殊性に基づきすでに支給されているものとしては、義務教育教員には「教職調整額」、医師等には「初任給調整手当」等がある。

5．夜間主コース担当教官に特別な給与措置を講ずること。

夜間主コースを設置する大学・学部(夜間大学院を含む。)の教官は、実態としては昼・夜間両コースを担当せねばならず、その勤務形態は特殊なものであり、負担が過重となっている。

また、夜間主コースは、本来、主として社会人学生を対象とするものであるが、現実としては、教育上多様な対応を要する学生が多数入学し、教官の負担を増加させている。

これらのことを考慮し、夜間主コース担当教官に特別な給与措置を講ずること。

6．教育・研究支援職員等の待遇改善を図ること。

教育・研究支援職員等の職務は、科学技術の急速な進展と国際化により一層複雑・高度化し、その役割は更に重要性を増している。また、科学技術基本法においても、研究開発に係る支援のための人材が研究開発の円滑な推進にとって不可欠であり、その確保、養成及び資質の向上並びにその適切な処遇の確保の必要性を指摘していることから、今後とも技術職員等の職務の専門性に見合う処遇が行われるよう措置する。

7．大学の中堅職員(事務系)の待遇改善を図ること。

大学においては、事務長、補佐、係長等の定数が固定されており、豊富な職務経験、職務遂行能力を持つ適任者でありながら、昇任・昇格が限定されるために俸給の上で格差を生じている。このことは、大学の中堅職員等が職務遂行意欲を欠く原因ともなり、ひいては大学運営に重大な影響を及ぼす結果となりかねない。

また、特に近年教育研究の国際化に伴う国際学術交流や留学生受入れ、大学院の整備充実、教育研究システムの多様化、複雑化への対応等高度の専門性を要する新たな業務が激増している。

よって、引き続き専門職制度を一層拡大するとともに、上位の級別定数について特段の措置を図る。

8．看護職員の待遇改善を図ること。

医学・医療の進展に寄与する診療、教育、研究の場であることを使命とする大学病院において、看護職員に課せられた任務は極めて高度化、専門化しており、その役割は重要なものとなっている。

また、看護婦等の人材確保の促進に関する法律が制定され、待遇の改善が図られてきているが、まだ十分とはいえない。

看護力の強化は、大学病院の運営にとって不可欠の課題であり、初任給を含む給与水準の引き上げを引き続き図る。

また、看護職員の勤務形態の特殊性等に配慮し、勤務環境の改善を図る。

平成10年度予備の経費配分実績

(職員旅費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予算額	27,359 千円	2. 配分額	27,359 千円
当初財源	27,788	(1) 特別事業旅費	5,398
節約額	2,084	(2) 入学試験経費	405
欠員充員分より繰入	1,655	(3) 各 部 局 へ の 補 足	21,556

(校 費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予算額	528,838 千円	(3) 厚生補導費	1,524 千円
当初財源	517,030	(4) 入学試験経費	27,073
節約額	19,389	(5) 本部運営費	42,344
欠員充員分より繰入	31,197	(6) 管理運営費	218,610
2. 配分額	528,838	庁舎等管理運営費	37,703
(1) 継年の補足経費	38,175	管理運営設備費	3,465
(2) 教育研究経費	91,996	施設等整備	177,442
教育研究用図書整備	2,169	(7) 各 部 局 へ の 補 足	109,116
教育研究用設備費	52,318		
教育研究用事業費	37,509		

平成10年度歳入・歳出決算額及び対前年度比較調

(文部省所管国立学校特別会計)

区 分	平成10年度決算額	平成9年度決算額	比較増 減額	増 減率
歳 入	円	円	円	%
附属病院収入	18,802,007,261	18,448,502,990	353,504,271	1.92
授業料及入学検定料	10,212,356,250	9,999,637,450	212,718,800	2.13
学校財産処分収入	159,460,000	0	159,460,000	
産学連携等研究収入	4,376,674,750	0	4,376,674,750	
雑 収 入	6,047,814,603	7,419,273,420	1,371,458,817	18.49
合 計	39,598,312,864	35,867,413,860	3,730,899,004	10.40
歳 出				
国立学校	55,141,029,714	55,559,677,539	418,647,825	0.75
人件費	33,733,397,545	33,190,588,861	542,808,684	1.64
物件費	21,407,632,169	22,369,088,678	961,456,509	4.30
大学附属病院	22,045,301,454	21,165,329,958	879,971,496	4.16
人件費	9,105,748,788	8,968,760,384	136,988,404	1.53
物件費	12,939,552,666	12,196,569,574	742,983,092	6.09
研 究 所	15,675,371,502	15,309,877,976	365,493,526	2.39
人件費	9,180,578,356	9,069,257,463	111,320,893	1.23
物件費	6,494,793,146	6,240,620,513	254,172,633	4.07
産学連携等研究費	4,259,130,099	0	4,259,130,099	
物件費	4,259,130,099	0	4,259,130,099	
施設整備費	16,775,366,050	5,636,501,000	11,138,865,050	197.62
物件費	8,319,208,000	2,305,970,000	6,013,238,000	260.77
施設費	8,456,158,050	3,330,531,000	5,125,627,050	153.90
特別施設整備費	2,773,630,750	2,683,136,250	90,494,500	3.37
施設費	2,773,630,750	2,683,136,250	90,494,500	3.37
合 計	116,669,829,569	100,354,522,723	16,315,306,846	16.26
人件費	52,019,724,689	51,228,606,708	791,117,981	1.54
物件費	53,420,316,080	43,112,248,765	10,308,067,315	23.91
施設費	11,229,788,800	6,013,667,250	5,216,121,550	86.74

公開講座

京都大学春秋講義（秋季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力により、下記のとおり平成11年度「京都大学春秋講義（秋季講座）」を開講します。

本学教職員及び学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30人を設けていますので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へお申し込みください。

記

会 場 法経第二教室
時 間 午後6時30分～8時
開催日程

月曜講義（5回シリ－ズ）テ－マ『20世紀をふりかえる』

開 講 日	講 師	テ - マ
10月4日	文学研究科 教授 柏倉 康夫	情報化の時代
10月12日	総合人間学部 教授 池田 浩士	大衆文化に見る戦争とファシズムの世紀
10月18日	経済学研究科 教授 八木紀一郎	日本の経済思想
10月25日	エネルギー科学研究科 教授 新宮 秀夫	技術の進歩と人間の幸せ
11月8日	総合人間学部 教授 篠原 資明	進化論と神
定 員	各講義 150人	
受 講 料	各講義 1,000円	

水曜講義

開 講 日	講 師	テ - マ
10月6日	農学研究科 教授 天知 輝夫	ワインと健康
10月13日	経済学研究科 教授 西村 周三	介護保険と医療保険
10月20日	化学研究所 教授 宮本 武明	ファッションを彩る先端技術
10月27日	医学研究科 教授 田中 紘一	移植とウイルス
11月10日	医学研究科 教授 藤田 潤	遺伝の悩み
定 員	各講義 150人	
受 講 料	各講義 1,000円	

受講資格 特に問いません。

問い合わせ先 総務部研究協力課研究協力掛
京都市左京区吉田本町（☎075-753-2041）

京 都 大 学 市 民 講 座 の 開 講

本学では、来る10月23日(土)、30日(土)の両日に、下記のとおり広く一般市民を対象とする「京都大学市民講座」を開講します。

本講座は、財団法人京大会館楽友会の協力により、昭和54年以来毎年開かれているもので、今年度は、「かわる」を共通テーマに、総合大学の特色を生かして学問の諸領域にわたる講義が行われます。

本学教職員及び学生に50人の特別受講枠(無料)を設けていますので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へお申し込みください。

記

会 場 法経第一・第四教室
開催日程 共通テーマ 『 かわる 』

第1日 10月23日(土) 13:00~16:40 (法経第四教室)	開講のあいさつ	総 長	長尾 真
	複雑系とは何だろう 「変わる」の新しい科学	情報学研究科助教授	稲垣 耕作
	生物多様性と共生 組み合わせによる生物の性質の変化	生態学研究センター教授	安部 琢哉
第2日 10月30日(土) 13:00~16:40 (法経第一教室)	21世紀で価値観は変わるか	文学研究科教授	加藤 尚武
	「この国のかたち」が変わる 21世紀に向けた中央省庁改革	法学研究科教授	大石 眞
	閉講のあいさつ	法学研究科教授	初宿 正典

受講定員 400人

受講料 1,000円(全講義を通しての受講料です。)

受講資格 特に問いません。

問い合わせ先 総務部研究協力課研究協力掛
京都市左京区吉田本町(☎075-753-2041)

終了報告

医療技術短期大学部第12回健康科学公開講座 1999 ～健康と環境～

12回を迎えた健康科学公開講座は、7月3日から7月24日まで4週にわたり毎土曜日午後、医療技術短期大学部において開催され、59人の市民の参加があった。

今回は、健康に影響を及ぼす様々な環境の変化の中で、私たちの健康の維持・増進のためにどうすればいいのかを考えるため、「健康と環境」をテーマに、8人の講師により以下の内容の講演を行った。

1日目 環境と感染症 食をめぐる環境	医療技術短期大学部助教授 岸下雅通 医学部非常勤講師 前田圭禧
2日目 子育てをとりまく環境 育児不安と母親の健康 内分泌攪乱化学物質(環境ホルモン)と生殖	医療技術短期大学部助教授 服部律子 医学研究科助教授 森 千里
3日目 身体障害者・老人をとりまく環境 QOLの向上を目指して 精神障害者をとりまく環境 ノーマライゼーションをめざして	医療技術短期大学部助教授 鈴木康三 医療技術短期大学部助教授 山根 寛
4日目 環境に適応できない子供たち 注意欠陥多動障害(ADHD)を中心に 環境世界と人間 21世紀の教育と医療の課題	医療技術短期大学部助手 加藤寿宏 兵庫県立看護大学教授 石井誠士

話題

クラブ紹介

ライフル射撃部

ライフル射撃部は、1960年（昭和35年）に創部され、今年で創部40周年を迎える。近年、入部者が増加し、今年度は総数48人となり、ライフル射撃部としては、関西の大学では最大の部員数を誇っている。

ライフル射撃は、他の競技に比べて知名度があるとはいえないが、その奥深さと面白さは、どの競技にも引けをとらない。完全な個人競技という特殊性から、練習は各人に委ねられており、自分自身との闘いの中で自らを高めて行くという精神は、まさに京都大学の伝統的精神を継承しているといえよう。

近年の成績をみると、1994年（平成6年）の秋季全関西学生ライフル射撃選手権大会のSFR3Pの種目で富本佳照選手が566点をあげて優勝、1995年（平成7年）の全日本学生ライフル射撃選手権大会のSFRP60の種目で和泉卓也選手が588点をあげて優勝し、1994年（平成6年）の全日本学生選手権大会のSFRP60の団体戦（3人制）では、1,743点をあげて優勝を遂げるなど、数々の素晴らしい成績を残している。これらの記録は、関西学生連盟の最高記録であり、未だ破られてはいない。

日々の練習は、創部翌年の1961年（昭和36年）に北部（農学部）グラウンドの北東角に設置された79m²のエアーライフル射撃場（国家公安委員会指定）で行っている。また、火薬の銃弾を使うSBライフルの射撃練習は、学外の施設で行っている。



春季全関西学生ライフル射撃選手権大会 能勢射場（大阪）

それらの練習場では、部員が「究極の静止」を目指して日々努力している。筋力のわずかな緊張、呼吸、さらには、精神状態までが銃口の極微細な揺れに直結し勝敗を決する。この競技では、周囲の世界から隔絶された孤独の中で自分自身に打ち勝って行ける人間だけが勝利を掴むことになる。今後、さらに多くの優れた射手が誕生することが期待されている。

（注）我が部では、ライフル銃の取り扱いはもちろんのこと、本学の射撃場にはライフル銃及び銃弾は一切保管せず、決められた場所の金庫に厳重に保管するとともに、試合や練習以外のためには、一切ライフル銃を持ち歩かないことなどを徹底している。

また、本学の射撃場を使用した部員の氏名、練習時間、使用弾数を使用簿に必ず記録し、学生部学生課のチェックを受けるなど、安全には万全を期している。

お知らせ

宇治キャンパス公開 '99

宇治キャンパスの化学研究所・エネルギー理工学研究所・木質科学研究所・食糧科学研究所・防災研究所・超高層電波研究センターでは、研究の現状と活動を学内外の方々に知っていただくために、キャンパスの一般公開を行っております。3回目となる本年も、10月23日（土）に、「エネルギー・食糧・環境 われわれはどこへ行くのか」というテーマで講演会を開催いたします。また、展示・実験室の公開も併せて行いますので、是非ご参加ください。

講演会「エネルギー・食糧・環境 われわれはどこへ行くのか」

日 時 10月23日(土) 9時30分～16時40分

会 場 宇治キャンパス 化学研究所 共同研究棟 大セミナー室

定 員 120人

参加料 無料

【高校生向けセミナー】(9:30～12:15)

9:30～10:15 食品の味とテクスチャーを科学する 食糧科学研究所助教授 松村 康生

10:30～11:15 未来のエネルギー：核融合の基礎 エネルギー理工学研究所教授 大引 得弘

11:30～12:15 レーザーが拓く先端科学技術 エネルギー理工学研究所教授 宮崎 健創

【公開講演会】(13:15～16:40)

13:15～14:15 エネルギー問題と核融合 エネルギー理工学研究所所長 井上 信幸

14:30～15:30 地球環境と微生物 化学研究所教授 江崎 信芳

15:45～16:40 環境を守り健康を育む日本型食生活のすすめ 食糧科学研究所教授 小川 正

展示・オープンラボ・公開実験

日 時 平成11年10月23日(土) 10時～16時

会 場 宇治キャンパス内の各施設等

詳細については、ホームページ(<http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/icr/OpenCampus/>)をご覧ください。

交 通 機 関 JR 奈良線または京阪宇治線 黄檗駅下車 徒歩10分

主 催 宇治地区 共通行事委員会

問い合わせ先 防災研究所 総務課庶務掛

E-mail: shomu@adm99.dpri.kyoto-u.ac.jp

Tel. 0774-38-4005 Fax. 0774-38-4030

超高層電波研究センター MU レーダー 一般公開の案内

超高層電波研究センター信楽 MU 観測所は、1984年11月の開所以来、今年で15周年を迎えました。これを記念し、滋賀県甲賀郡信楽町に設置されている MU レーダーの一般公開を、来る10月31日(日)午前10時から午後4時まで行いますのでお知らせします。

MU レーダーは直径約100mの円形アレイ・アンテナを備えた周波数46.5MHzの大気観測用レーダーです。1984年11月の完成以来、最先端の電子技術を駆使して高度500kmまでの地球大気の動きを観測しています。一般公開では、MU レーダー装置の見学を中心に、地球環境問題に貢献するレーダー技術の展示を行います。

MU レーダーへの交通は、信楽高原鉄道・信楽駅から自動車で約15分(国道422号線を上野市方面へ向かって進み、滋賀・三重県境手前約1kmを左折)です。当日は信楽駅から送迎用のマイクロバスを運行します。MU レーダー内に食堂・売店などはありません。またスリッパなどを持参してください。お問い合わせは、電話(0748)82-3211 超高層電波研究センター信楽 MU 観測所・橋口助手まで。

ホームページ：<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/radar-group/mu/openhouse.html>